二〇二五年度

D 国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべて**黒鉛筆または黒のシャープペンシル**で記入することになっています。
　黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
　（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は**20ページ**までとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
　なお、問題番号は**一**～**三**となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に**氏名**のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1 ○ 2 ● 3 ○ 4 ○ 5

（3と解答する場合）

※　大問一・二については著作権の関係により掲載できません。
引用した文章は次の通りです。

・大問一　山口昌男「旅の文体」
・大問二　細馬宏通『フキダシ論』

三　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

野は［　　］・萩咲きて、秋のけしきほど、しめやかにおもしろき事はなし。(1)心ある人は歌こそ和国の風俗なれ。何によらず、花車（注1）の道こそ一興なれ。

奈良の都のひがし町に、しをらしく住みなして、明暮茶の湯に身をなし、興福寺（注2）の花の水をくませ、かくれもなき楽助（注3）なり。

ある時、この里のこざかしき者ども、朝顔（注4）の茶の湯をのぞみしに、かねがね日を約束して、万に心を付けて、その朝七（注5）つよりこしらへ、この客を待つに、大かた時分こそあれ、昼前に来て、案内をいふ。

(2)亭主腹立して、客を露路（注6）に入れてから、提灯をともして、迎ひに出づるに、客はまだ合点ゆかず、(3)夜の足元するこそをかしけれ。あるじおもしろからねば、花入れに土つきたる芋（注7）の葉を生けて見すれども、(4)その通りなり。とかく(5)心得ぬ人には、心得あるべし。亭主も客も、心ひとつの数寄人にあらずしては、たのしみも欠くるなり。

むかし功者なる、茶の湯を出だされしに、(a)庭の掃除もなく、(6)梢の秋のけしきをそのままにしておかれしに、客もはや心を付けて、いかさまめづらしき道具出づべき(b)とおもふに、案のごとく掛物（注8）に「八重葎（注9）しげれる宿」の古歌を掛けられける。

またある人に、漢（注10）の茶の湯を望みし(c)に、諸道具みな唐物をかざられしに、掛物ばかり、阿倍仲麻呂（注11）が詠みし、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌を掛けられたり。いづれも感ずるに、(d)「この歌は仲麻呂、唐土から古里をおもうて詠みし歌なり」と、しばらく(7)亭主の作の程をながめけるとなり。「客もかかる人こそ、(8)この道をすかるる甲斐あれ」と、ある人の語りし。

（『西鶴諸国ばなし』による）

（注）
1　花車――みやびやかな芸術。
2　興福寺の花の水――興福寺の西金堂のほとりにあった名水。
3　楽助――気楽に暮らす者。
4　朝顔の茶の湯――昔、千利休の庭に朝顔が見事に咲いていると聞いた太閤秀吉が、これを見ようと訪れると、庭には朝顔がなく茶室にのみ朝顔が活けられてあったので感心したという故事により、江戸時代初期によく行われた茶事。
5　朝七つ――午前四時ごろ。
6　露路――茶室への通路。
7　芋の葉――さつま芋の葉。さつま芋はヒルガオ科で、花は昼顔のごとく朝顔に似る。
8　掛物――床の間の掛軸。
9　「八重葎しげれる宿」――恵慶の和歌「八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり」（『拾遺和歌集』など）。
10　漢の茶の湯――唐物（中国より舶来の品）を用いてする茶の湯。
11　阿倍仲麻呂――奈良時代の人。渡唐して玄宗皇帝に仕えた。官を辞し日本に帰国しようとしたが暴風のため果たせず、ふたたび唐朝に仕え、唐土で没した。

問

(A)　空欄□に入る語として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　梅　2　菖蒲　3　水仙　4　藤　5　菊

(B)　――線部(1)の現代語訳を八字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(C)　――線部(2)について。亭主はなぜ「腹立」したのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　客が時間に遅れたのに、亭主に口先だけのいいかげんな詫び方をしたから。

2　客が亭主をさしおいて、茶の湯の案内をしたから。
3　亭主がせっかく準備をしたのに、客が茶の湯の作法を分かっていなかったから。
4　客がわざと遅れてやって来て、亭主をからかおうとしたから。
5　早くから日時を約束していたのに、客がその時間を忘れていたから。

(D)　――線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　夜道で足元にあるものを探そうとする
2　夜になってから改めて足を運ぼうとする
3　夜道を歩く人を気遣おうとする
4　夜道を歩くのを楽しもうとする
5　夜道を行くような歩き方をしようとする

(E)　――線部(4)はどのようなことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　亭主が客への謝罪の意を示したのも当然だということ。
2　客が亭主にまだ抵抗しようとしていること。
3　一見無作法な亭主の行為も、この場ではかえってふさわしいということ。
4　客が亭主の行動の意味を、依然として理解できていないこと。
5　客が亭主のもてなしの心に気づいて、それを素直に受け入れていること。

(F)　――線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　雅趣を解さない客には、亭主の側もそれなりの心づもりが必要になる。
2　無作法を許さない亭主かどうか、客の側もあらかじめ分かっておく必要がある。
3　茶の湯の場で困らないためには、亭主も客も作法を十分に修得しておく必要がある。

4　茶の湯の作法や風流を知らない客には、亭主がそれを教えてあげる必要がある。
5　無作法なことをする亭主に対しては、客も臨機応変な対応が必要になる。

(G)　═══線部(a)〜(d)の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1　推量　2　意志　3　可能　4　過去
5　尊敬　6　受身　7　断定　8　存在

(H)　────線部(6)、「庭の掃除もなく、梢の秋のけしきをそのままにしておかれし」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　庭をあえて掃除せず荒れたままにすることで、茶道具の素晴らしさを際立たせるため。
2　秋の景色をそのまま残しておかないと、秋ならではの風情が客に伝わらないため。
3　庭の掃除に手間をかけず、そのぶん茶の湯での客のもてなしに全力を傾けるため。
4　掛物の古歌にあわせ、あえて庭を手入れせずそのままにして客をもてなすため。
5　秋の景色を好む客の趣味に心をあわせて、一緒に茶の湯を楽しむため。

(I)　────線部(7)の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　仲麻呂の歌の素晴らしさを知っているゆえ、場違いであってもあえて用いた亭主の英断。
2　その場の誰も気づかなかった仲麻呂の歌の意を理解し、もてなしに用いた亭主の気転。
3　仲麻呂の歌の意を理解したときに、はじめて趣向が分かる仕組みにして用いた亭主の工夫。
4　中国の諸道具のなかに、うかつにも日本の仲麻呂の歌をまじえてしまった亭主の失態。
5　仲麻呂の歌を、さもみずからの作であるかのように装って掛物に用いた亭主の愚行。

(J)　────線部(8)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　客の好みを解する亭主

2　亭主の心配りを解する客
3　茶の湯の作法をよく知る亭主
4　茶道具の価値がわかる客
5　和歌の心を良く知る亭主

(K)　次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　茶の湯ではむやみに高価な品を用いてはならない。
ロ　茶の湯では亭主と客との意思の疎通が重要である。
ハ　昼間に茶の湯を催すのは困難である。
ニ　茶の湯に古歌を用いるのは避けるべきである。
ホ　茶の湯に限らず和歌を解する心があるとおもしろい。

【以下余白】